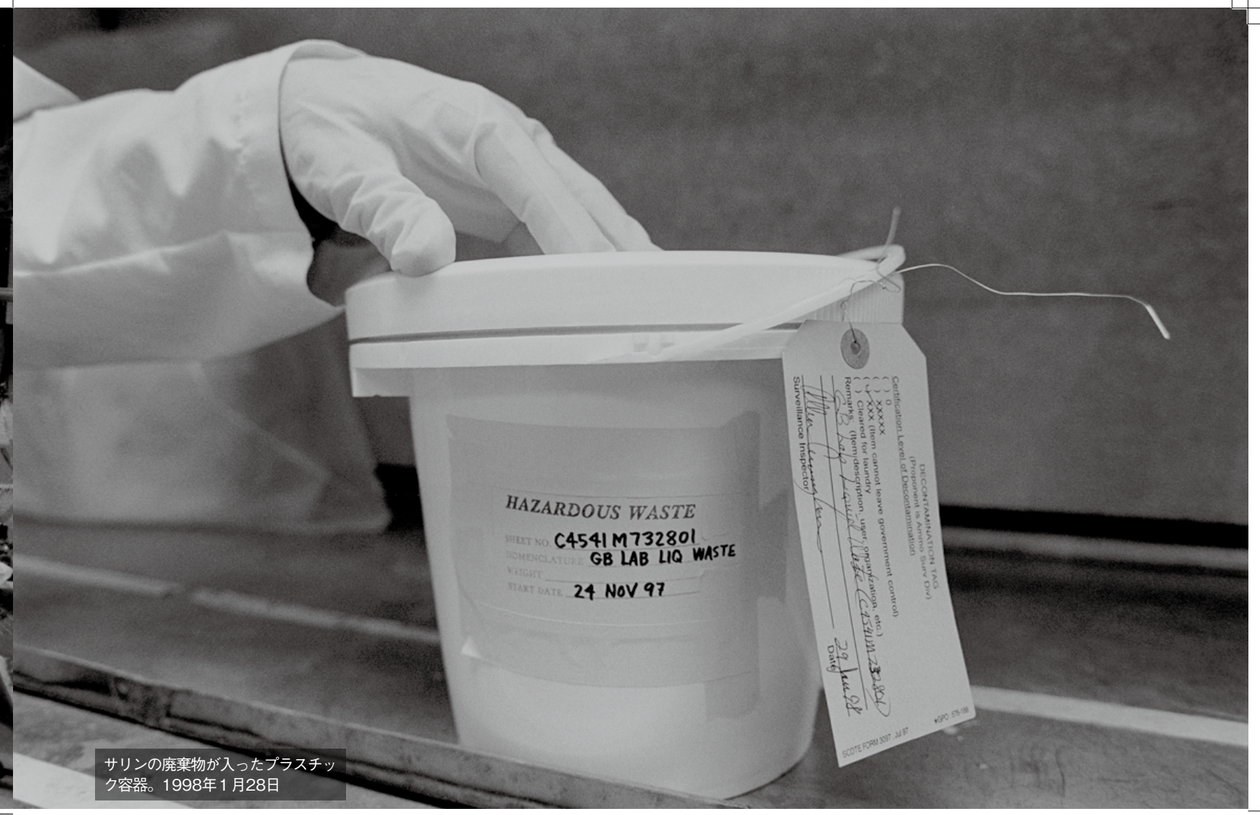
アメリカ 世界最大の化学兵器極秘処分施設

アメリカ・ユタ州に、第一次世界大戦から東西冷戦時にかけて大量に作られた化学兵器の処分施設がある。
化学兵器は安価に大量生産が可能だといわれるが、その処分には莫大な危険と時間を要する。
この施設では、数十年の年月をかけ、2013年末、ようやく貯蔵兵器の処分が完了した。
とはいえ、アメリカにはいまだ数千トンの化学兵器が貯蔵されており、
それらの処分が完了するのは2023年の予定だという。

写真・文／ディディエ・ルーフ
Photo & Text by Didier RUEF

ガスマスク、長靴、防護服を身に付け、容器の漏れを点検する作業員。中にはサリンが入っている。写真は全てアメリカ・ユタ州。1998年1月25日

防護服を身に付け、汚染エリアで働く作業員。1998年1月25日



サリンの廃棄物が入ったプラスチック容器。1998年1月28日

のどかな町の厳戒区域

1998年、私はデゼレット化学兵器貯蔵施設に向かうために、ユタ州の砂漠を車で走っていた。曲がりくねった道を行くと、前方に焼却炉が見えた。それはまるで干上がった海底に横たわる船舶のようだった。2本の煙突からゆっくりと煙がたちのぼり、雪をかぶったオウカー山の頂きのほうに流れていった。その向こうには人口1万8000人の小さな町トゥーイルがひかえ、さらにその東北90キロには州都、ソルトレイクシティがある。

デゼレット化学兵器貯蔵施設の門は昼も夜も武装した兵士に警備され、出入りは厳重に制限されていた。というのも、普通の工場のように見えるここは、世界でもっとも大量の化学兵器を貯蔵し、焼却する米軍施設だからだ。

この施設が開設されたのは42年の第二次世界大戦のさなか、日本軍による真珠湾攻撃のあった翌年のことだ。

終戦直後から45年続いたソ連との冷戦時代が、貯蔵量をさらに増やした。施設は巨大化し、最盛期の96年には米軍が所有する廃棄化学兵器の45パーセントを貯蔵していた。

当時、毒ガス1万3600トンがここにあった。マスタードガスとして知られる、糜爛(びらん)剤のH、HDやHTだけではなく、神経ガスのVX、GA(タブン)やサリン、さらには110万個のM55ロケット弾、迫撃弾、山のような地雷……。

アメリカ連邦議会は85年にはこのデゼレットの施設、および国内の他の7か所、それから太平洋のジョンストン環礁に蓄えられている古い武器をすべて焼却するように命じていた。そして2002年3月までにデゼレットのすべてのサリン、05年6月までにVX、09年3月までに3216トンの容器、5万4432トンのロケット弾等が実際に焼却された。11年初頭には97パーセントの作業が終了した。

しかし、ここにきて容器の腐食が予測していたよりも進んでいたマスタードガス弾や迫撃弾等が大量に発見され、関係者を驚愕させた。すぐに日本の神戸製鋼からハイテク技術を使った特殊な機械を導入し、約3年がかりでこれらの破壊を進め、ようやく昨年10月になんとか処分が完了した。

化学兵器が処分されたことで、一番ホッとしているのは、付近の3万人の住人かもしれない。実際、同時多発テロ事件の翌年、02年9月には「不法侵入者が付近に潜伏。テロの恐れあり」の警戒情報が流れる騒ぎもあった。

それにしても大量の化学兵器が貯蔵されていたのは、イラクではなくアメリカ国内だったということになる。

(翻訳・構成／野口みどり)

空気中の有害化学物質の量を調べる科学者。1998年1月27日

化学兵器貯蔵施設。各棟が草で覆われており、近くには処理施設がある。
1998年1月27日

ディディエ・ルーフ

フォトジャーナリスト。環境問題や原発、公害を中心に取材活動をおこなう。
1961年、スイス・ジュネーブ生まれ。